

本間美術館所蔵(伊勢物語)・「伝民部卿局筆本」／「日本古典文学会編集」・「本篇」, 別冊「ほろぶ出版」, [1976.4.]

『伊勢物語』(傳民部卿局筆 塗籠本)

一

昔、男ありけり。うひか^(初冠)うぶりして、ならの京、かすがのさとに、しるよしして、かり^(狩)にいきけり。そのさとに、いとまなまめきたるをむな^(女)ばらすみけり。かのをとこ、かゝ^(ひ)まみてけり。おもほえず、ふる里に、いともはしたなくありければ、うちまどひにけり。男、きたりけるかりぎぬのすそをきりて、うたをかきてやる。そのをとこ、忍ずりのかりぎぬをなむきたりける。

春日野乃わかむらさきのすりころも

しのぶのみだれかぎりしられず

となむ、を^(追ひ)いつぎてやれりけるとなん。いひつぎてやれりける、おもしろきこととや^(おもひけん一本)

みちのくに忍もぢずりたれゆるに

みだれそめにし一本
むわれならなくに

といふ哥のころば多なり。昔人はかくいちはやきみやびをなむしける。

二

昔、男ありけり。みやこのはじまりける時、ならのきやうははなれ、この京は人の家いまださだまらざりける時に、西京にをんなありけり。その女、よの人にはまさりたりけり。かたちよりは心なむまさりたりける。人所ひとの身みもあらざりけらし。それを、かのみめをとこ、うち物かたらひて、かゝりきて、いかがおもひけん、時はやよひのついたち、雨うちそぼふりけるに、やりける。

をきもせずねもせでよるをあかしては

はるのものとてながめくらしう

三

むかし、をとこありけり。けさうじける女のもとに、ひしきもといふものをやるとて、

おもひあらばむぐらのやどにねもしなむ

ひしきものには袖をしつつも

五條後の、いまだ御門にもつかうまつらで、ただ人にておはしましける時の事なり。

四

昔、東五條に、おほきさひの宮おはしましける、西のたいに、すむ人ありけり。それを、ほいにはあらでゆきとぶらふ人、こころざしふかかりけるを、むつきの十日あまり、ほかにかくれにけり。有所はきけど、人のいきよるべきところにもあらざりければ、なを、うしとおもひつつなんありける。またの年のむ月に、梅華（睦月）ざかりなるに、こぞをおもひて、かのにしのたひにいきてみれど、こぞにうべうもあらず。あばらなるいたしきに、月のかたぶくまげふせりて、こぞを戀（恋）・てよめる。

月やあらぬはるやむかしの春ならぬ

我身ひとつはもこのみにして

とよみて、ほの／＼とあくるに、なく／＼かゝりにけり。

五

むかし、男ありけり。ひんがしの五條わたりに、いと忍（忍）・いきけり。しのぶところなれば、かどよりもいらで、ついで（築地）のくづれよりかよひけり。人たかしくもあらねど、たびかさなりければ、あるじききつけて、そのかよひぢ（通路）

に、よごと、人をすゑて、まもらせければ、かの男、ゑあはでかゑりにけり。さてつかはしける。

人しれぬわがかよひ路のせきもりは

よひ／＼ごと／＼うちもねなむ

とよみけるをききて、いといたう志んじけるあるじ、ゆるしてけり。

六

昔、男有・けり。をんなのゑあふまじかりけるを、としをへていひわたりけるに、からうじて、をんなのころあはせて、ぬすみいでにけり。あくたがはといふ河を、ゐていきければ、草のうゑにをきたる露を、

「かれはなにぞ」

となむ男にとひける。ゆくさきは、いととほく、よもふけければ、鬼あるところともしらで、雨いたうふり、かみさゑいといみじうなりければ、あばらなるくらのありけるに、女をばをくにをしいれて、をとこは、ゆみやなくひをおひて、とぐちに、はやよもあけなむとおもひついたりけるほどに、鬼はやをんなをば、ひとくちにくひてけり。

「あらや」

といひけれど、かみのなるさはぎに、ゑきかざりけり。やう／＼夜のあけゆくを、みれば、いてこし女なし。あしずりしてなけど、かひなし。

白玉かなにぞと人のとひし時

露とこたゑてけなましものを

これは二條のきさきの、御いとこの女御のもとに、つかうまつりびとのやうにていたまへりけるを、かたちのいとめでたうおはしければ、ぬすみいでたりけるを、御せうとのほりかはの大將もとつねの、國經大納言などのいまだ下らうにて、うちへまいりたまふに、いみじうなく人のあるをきまつけて、とりかゑしたまひてけり。それを、かくをにとはいゑるなり。いまだいとわかうて、ただにきさひのおはしけるときとや。

七

昔、をとこありけり。女をぬすみて、いてゆくみちにて、

「みづのまむ」

ととふに、うなづきければ、つきなむどもぐせねば、手にむすびてのます。さて、ゐてのぼりにけり。をむなはかなくなりければ、もとの所へゆくみちに、かのし水のみし所にて、

おほはらやせがひの水をむすびあげて

あくやといひし人はいづらぞ

といひてきまかゝり、あはれ／＼といへど、かひなし。

八

昔、男ありけり。京にありわびて、あづまへゆきけるに、伊勢、をはりのあはひのうみづらをゆくに、浪のいと
しろくたちかゝるをみて、思・ことなきならねば、をとこ、

いとくしくすぎ行・かたのこひしきに

うらやましくもかゝるなみかな

九

むかし、男ありけり。其男、みはよくなき物におもひなして、

「京にはをらじ、あづまの方にすむべきところもとめに」

とて、いきけり。しなのの國あさまのたけに煙のたつをみて、

しなのなるあさまのたけにたつ煙

をちかた人のみやはとがめぬ

もとよりともとする人ひとりふたりして、もろともにゆきけり。みちしれる人もなくて、まどひゆきけり。

三かはのくに、八橋といふところ□□にいたりぬ。そこ・やつはしといふ事は、水のくもでにながれわかれて、木八

・わたせるによりてなむ、八橋とはいゑる。そのさはのほとりに、木景にをりゐて、かれいゑくひけり。そのさは

に、かきつばた、いとおもしろく、さきたり。それをみて、京いとこひしくおぼえり。さりければ、ある人、

「かきつばたと云・いつもじを、くのかしらにすゑて、旅心よめ」

といひければ、ひと〇〇の人よめり。

から衣きつなれにしつましあれば

はる／＼きぬるたびをしぞおもふ

とよめりければ、みな人、かれないのうゑになみだをとほとびにけり。

ゆき／＼て、するがのくににいたりぬ。うつの山にいたりて、わがゆくすへのみちは、いとくらくほそきに、つた

かづらはしげりて、物ころぼそふ、すずろなるめをみると思・に、修行者あひたり。

「かかるみちには、いかでかおはする」

といふに、みれば、みし人也けり。京に、そのひとのもとにとて、ふみかきて、つく。
するがなるうつ山邊のうつつとも

ゆめにもひとのあはぬなりけり

ふじの山をみれば、五月つごもり、雪いとしろくふりたり。

時しらぬやまはふじのねいごとてか

かのごまだらに雪のふるらん

この山は、うゑはひろく、しもはせばくて、おほがさのやうになむありける。高・はひゑの山を、はたちばかりかさねあげたらむやうになむありける。

なをゆきく／＼て、むさしのくにと、しもつふさの國と、ふたつがなかに、いとのおおきなる河あり。そのかはの名をば、すみだ河となむいひける。其河のほとりに、むれいて、おもひやれば、かぎりなくとをくもきにけるかなと、わびをれば、わたしもり、

「はや船にのれ、日もくれぬ」

といふ。のりて、わた覽とするに、みな人、ものわびしくて、京におもふ人なきにしもあらず。さるをりに、白鳥の、はしとあしとあかきが、しきのおおきさなる、水上にあそびつつ、いををくう。京には見ゑぬ鳥なれば、人く見しらず。わたしもりにとゑば、

「これなむ都鳥と申す」

といふをききて、

なにしほはばいざ事とはんみやこ鳥

我おもふ人はありやなしやと

とよめりければ、舟人こそりてなきにけり。

その河渡・すぎて、京に見し、あひて、物語して、「ことごとやある」といひければ、

みやこ人いかがととはばやまたかみ

はれぬ雲井にわぶとたゑよ

十

昔、男、むさしのくにまどひありきけり。そのくになるをんなお、よばひけり。父はこと人にあはせむといひ

けるに、母なんあてなる人にこそつげたりける。ちちはただ人にて、ははなむ藤原なりける。さてなむあてなる人にとはおもひける。このむこがねに、よみてをこせたる。すむさとは、むさしのくに、いるまのこをり、
(三芳野)
みよしののさとなり。

みよしののたのむのかりもひたぶるに

きみがかたにぞよるとなくなる

かゑし、むこがね、

我かたによるとなくなるみよしのの

たのむの鴈をいつかわすれん

人のくににても、かかる事はたゑぞありける。

十一

昔、男有・けり。あづまへゆきけるに、ともだちにみちよりをこせける。

わするなよほどは雲井になりぬとも

そらゆく月のめぐりあふまづ

十二

昔、男ありけり。女をぬすみて、むさしの國へゆくほどに、ぬす人なりければ、くにのつかさからめければ、をんなをば、草村のなかにをきて、にげにけり。みちゆく人、

「此野はぬす人あり」

とて、ひをつけむとするに、をんなわびて、

むさしのは今日はなやきそわかぐさの

つまもこもれりわれもこもれり

とよみけるを、ききて、この女をばとりて、ともにゆきにけり。

十三

昔、むさしなるをとこ、京なるをむなのもとに、

「き「ゆればはづか傍書。き「え同(上)ねばくをて」

とかきて、うはがきた、『むさしあふみ』とのみかきて、のちをともせずなりにければ、きやうよりをんな、

むさしあぶみさすがにかけておもふには

とはぬもつらとふもうるさし

とあるをみてをむなたゑがたきこちしけり。

とどばいふとはねばうらむむさしあぶみ

かかるをりにや人はしぬらん

十四

昔、男、みちのくにに、すずろにいたりにけり。そこなる女、京の人をば、めづらやかにかおもひけん、せちに
おももるけしきなむみへける。

さて、をむな、

なか／＼にこひにしなずはくはこにぞ

なるべかりけるたまのをばかり

うたさへぞ、ひがめりける。さすがにあはれとやおもひけん、いきてねにけり。よぶかくいでにければ、女、

よもあけばぎつにはめなでくたかけの

まだきになきてせなをやりつる

といひける。男、京へなむまかること、

くりはらのあねほのまつひとならば

みやいのつとむとむとこはまし

とどへりければ、よつ／＼ほひひ、

「思／＼」

とぞいひける。

十五

昔、男、みちのくにへいきありきけるに、なでうことなき人のむすめにかよひけるに、あやし／＼、さやうにて
あるべきをんなにはあらずみゑければ、

忍／＼止しのびてかよふみちもがな

人のこころのをくもみるべく

をんな、かぎりなくめでたしとおもへど、さるさかなき多びす所にて、いかがはせむ。

十六

昔、みちのくにに、男すみけり。京へいなんとするに、女、いとかなしと思・て、むまのはなふけをだにせむとて、をきのゐ、みやこつしまといふ所にて、さけのませんとしてよめる。

をきのいて身おやくよりもわびしきは

みやこつしまのわかれなりけり

とよめりけるに、めでたとまりにけり。

十七

昔、紀有常といふ人ありけり。みよの御門に仕・て、ときにあひたりけれど、のちには、よかはり、時うつりにければ、よのつねのときうしなへる人になりにけり。人がら心うつくしう、あてなる事をこのみて、こと人にもにず。よのわたらひ心もなく、まづしくて、なを、昔よかりし時の心ながらありわたりけるに、よのつねの事もしらず。

年ごろありなれたるめも、やう／＼とはなれて、ついに尼になりて、あねのさきだちて尼になりけるが

もとへゆく。をとこ、まことにもつまでき事こそなかりけれ、いまはとてゆくを、いとあはれとおもひけれど、まづしければ、するわざもなかりけり。おもひわびて、ねんごろにかたらひけるともだちに、

「かう／＼いまはとてまかるを、なに事もいささかの事もせでつかはず事」

とかきて、をくに、

手ををりてへにける年をかぞふれば

とをといひつつよつはへにけり

このともだち、これおみて、いとあはれとおもひて、女のさうぞくを、一具をくるとて、

としだにもとをとてよつをへにけるを

いくたび君をたのみきつ覽

かくいひたりければ、

これやこの□□□□は、ころもむべしこそ

君がみけしにたてまつりけれ

よろこびにたゑかねて、また、

秋やくるつゆやまがふとおもふまで

あるはなみだのふるにぞありける

十八

昔、年ごろをとづれざりける人の、さくらみにきた傍書りければ、あるじ、

あだなりと名にこそたてれ櫻はな

としにまれなる人もまちけり

かゝし、

今日こそはあすは雪とぞふりなまし

きゑずはありとも傍書。華とみましや

十九

昔、なまごころあるをんなありけり。をとこ、とかういひけり。女、哥よむ人なりければ、ごころみむとて、
むめ(梅)を(折)をりてやる。

くれなひ(あ)に(あ)にほふは(あ)いづらしら雪の

ゑだ(あ)もたわわにふるやともみゆ

男、しらずよみによみけり。

くれなひ(あ)に(あ)にほふがうゑ(あ)のしら雪は

をり(折)ける人のそでかとぞみる

二十

昔、男、みやつかへしける女、ご(御)だ(達)ちなりける人を、あひしれりけり。

ほどもなくかれにけり。をなじ所なりければ、さすがに、女のためには見ゆる物から、をとこは、あるものにもお
もひたらねば、をんな、

あまぐものよそにも人のなりゆくか

さすがにめにはみゆるものから

とよめりければ、をとこ、返し、

あまぐものよそにのみして 一本

ゆきかゝりそらにのみしてふることは

わがいるやまのかぜはやみなり(速み)

とよめるは、あまたをとこあるをむなになむありける。

二十一

昔、男、やまとにある女をよばひてあひにけり。さて、ほどもへて、みやづかへしける人なりければ、かゑりけるみちに、やよひばかりに、やまにかゑでのみぢの、いとおもしろきをおりて、すみしをむなもとに、道より、君がためたをれる(手折)ゑだははる(春)ながら

かくこそ秋のもみぢしにけれ

とてやりたりければ、返事は京にいきつきてなむもてきたりける。

いつのまにうつろふいろのつきぬらん

君がさとにははるなかるべし

二十二

昔、男女、いとかしこう思(心)・かはして、こと心なかりけるを。いかなる事かありけむ、はかなき事にことつけて、世中(よのなか)をうしと思(心)・て、いでていなむとて、かかるうたなむ物にかきつけける。

いでていなばこころかろしといひやせん

よのありさまを人はしらずて

とよみをきて、いでていにけり。この男、かくかきをきたるを見て、こころうかるべき事もおぼえぬを、なにによりてならむ・、いといたう、うちなきて、いづかたにもとめゆかむと、かどにいでて、とみかうみけれど、いとこそは、か(かりとむ)ともおぼえざりければ、かゑりいりて、

おもふかひなき世なりけり年月を

あだにちぎりてわれかすまひし

人はいさながめやすら(おむひや一本)んたまかづら

おもかげにのみいでてみゑ(え)つゝ

とい(ひ)〇(傍書)てながめをり。この女、いとひさしうありて、ねむじかねてにやあらむ、かくる(こひ)・を(む)こしたり。

いまはとておするるくさのたねをだに

人のこころにまかせず見(も)がな(傍書)

かゑし、男、

わすれぐさかるととだにきくものならば

おもひけりとはしりもしなまし

また／＼ありしよりけにいひかはして、をとこ、

わする覽とおもふころ〇(傍書)うたがひに

ありしよりけにもぞかなしき

かゑし、

なかぞらにたちいる雲の跡もなく

身のはかなくもなりぬべきかな

といひけれども、をのがよ(世々)になりなければ、うとくなりにけり。

二十三

昔、はかなくてたへ(絶え)にけるなかをば、わすれざりけむ、をんなのもとより、

うきながら人をば(え)ゑしもわすれねば

かつうらみつなをぞ(ほ)ひしき

といひければ、『されば』とおもひて、

あひはみでころひとつをかはしまの

水のながれてた(え)ゑじとぞおもふ

とはいひけれど、そのよ(夜)にけり。いにしへ、ゆくさきの事どもぞおもふ。

秋のよのちよ(千代)をひとよになぞらへて

やちよしね(八千夜)ばやあくよしのあらむ

かゑし、

秋のよの千夜をひとよになせりとも

ことば(言葉)の(鳥)こりてとりやなきなん(む)

二十四

むかし、いな(あ)かわたらひしける人のこども、井のもとに出(い)でてあそびけるを、をと(お)なになりなければ、
とこも女も、はぢ(恥)かはしてありけれど、男はこの女をこそ(え)ゑめ、女はこの男をとおもひつゝ、を(お)やのあはする事
もきかでないありける。さて、このとなりのをとこのもとよりかくなむ、

つゝぬづのぬづ(筒井)にかけしまろがたけ

を(む)ひにけらしなきみ見(あひ一本)ざるまに

か(ひ)ゑし、女、

くら(肩)べし(肩)ふりわけがみもかたすぎぬ

君ならずしてたれかな(撫あく一本)つゞべき

かくいひて、本意の(こ)とくあひにけり。

さて、年(經)ごろふるほどに、女のを(お)やなくなりて、たよりなかりければ、かくてあらむやはとて、河内國ニ高安のこほりに、いきかよふ(所傍書)。い(い)できにけり。されど、このものをむな、あ(悪)しとおもゑるけしきもなく、くるれば、い(い)だしたててやりければ、男、『ことこころありて、かかるにやあらむ』とおもひうたがひて、前裁のなかにかく(む)れて、かの河内へいぬるかほにてみれば、をむな、いとようけさ(假粧)うじて、うちながめて、

かぜふけば(お)をきつしらなみ龍田やま

よ(夜半)はにやきみがひとりゆく(む)覽

とよめりけるをききて、かぎりなく、かなしとおもひて、河内へも、をさ(か)よはずなりにけり。

さて、まれ(高安)／＼、かのたかやすのこほりにいきてみれば、はじめこそ心にくくもつくりけれ、いまはうちとけて、かみをかしらにまきあげて、おもなが(面長)やかなるをむなの、て(傍書)づ(か)ら、い(ひ)あがひをとりて、け(箭子)このうつは物にもりて(お)いたりけるを見て、こころうがりて、いかずなりにけり。

さりければ、かの女、やま(大和)とのかたをみやりて、

君があたりみつ(お)とをくらむい(生駒山)こまやま

雲なかくしそ雨はふるとも

といひて、み(見出す)いだすに、からうじて、大和人

「いぢ」

とい(ひ)ゑり。よろ(待)こびて、まつに、た(た)び／＼すぎぬれば、

君(む)といひ(夜毎)しよ(こ)とにすぎぬれば

たのめぬものこひ(傍書)つつ(そ)をる

とい(ひ)ゑりけれど、男、すま(ま)ずなりにけり。

昔、男、かたるなかにすみけり。をとこ、みやづかへしにとて、わかれをしみてゆきけるままに、みとせ(来)ごぞりければ、まちわたりけるに、いとねんごろにいひける人に、

「こよひあはむ」

と、ちぎりたりけるに、この男きたりけり。

「このとあけ給」(言)

とたたきければ、あけでなむ哥、をよみていだしたりける。

あらたまのとしのみとせをまちわびて

ただこよひ(新枕)こそにひまぐらすれ

といひいだしたりければ、をとこ、

あづさ弓まゆみつきゆみとしをへて

わがせしがごとうるはしみせよ

といひていなん(む)としすれば、うらみて、をむな、

あづさ弓ひけどひかねどむかしより

こころは君によりにしものを

といひけれど、男かゑり(む)にけり。女、いとかなしうて、しりにたちて、をひけれど、ゑ(え)をひつかで、しみづのあるところ(賦)にふしにけり。そこなるい(は)わに、をよび(む)のちして、かきつけけり。

あひおもはで(離)かれぬる人をとどめかね

わが身はいまぞ(え)きゑはてぬめる

とかきて、いたづらになりにけり。

二十六

昔、男ありけり。あはじともいはざりける女の、さすがなりけるがもとに、いひやりける。

秋の野(一本)のにささわけしあさの袖よりも

あはでぬる(夜)よぞひぢまさりける

いづこのみなるをんな、かゑ(え)し、

みるめなきわが(身)みのうし(海)としらねばや

かれな(離)であまのあしたゆくくる

昔、男、人のむすめのもとに、(一夜)いちやばかりいきて、またもいかずなりにければ、女のをや、(む)はらだちて、手あらふところに、ぬきすをとりてなげすてければ、たらひの水に、(泣)なくかげのみ(見)ゑけるを、身づから、
 わればかりものおもふ人はまたあらじと

おもへば水のしたにありけり

とよめりけるを、このこござりけるをとこききて、

みなくちにわれやみゆらんか(む)はづさ(蛙)ゑ

水のしたにてもろこゑになく

昔、いろこのみなりける女、いでていにければ、いふかひなくて、男、

な(あ)どてかくあ(あ)ふ(あ)こかたみとなりぬらん(む)

みづも(む)らさ(む)じとち(む)ぎりしものを一本

(段數ナシ) 二條後の、春宮のみやすどころとまうしける時、御(おほん)かたのはな(え)のゑんに、めしあげられたりける肥後

② すけなりける人、

花にあかぬなげきはいつもせしかども

あ(あ)ふ(あ)のこよひ(け)にしくも(をり)のはなき(一本)

とよみたてまつれり。

昔、をとこはつかなりけるをむなな、

あふ事はたまのをばかりおぼほ(え)へて

つらき(む)ころのながくみるらん(む)

昔、男、みやのうちにて、ある(御)だちのみつぼねのまゑをわたりけるに、なにをあたとかおもひけん(む)、

「よしやくさばのならむきが(み)にむ(一本)」

と、いひければ、をこし、

つみもなき人をうちへばわすれぐさ

を(お)のがうへ(生)にぞおふといふなる

といふを、ねたう、を(む)なもおもひけり。

三十二

昔、男、つづくに、う(む)ばら(菟原)のこ(ほ)をりにすみける女に、かよひける。『このたびか(ひ)多りなば、または、よも(來)こじ』とおもへるけしきをみて、女のうらみければ、

あしま(多一本)よりみちくるしほのいやましに

君に(こ)ころをおもひますかな

をんな、か(ひ)多し、

こもりへ(え)におもふ心をいかでかは

ふねさすさをのさしてしるべき

い(あ)なか人の事にては、いかが。

三十三

昔、男、つれなかりける人のもとに、

い(言)多(え)ば多(え)にい(言)はねばむねのさはがれて

こ(こ)ころひとつになげくころかな

おもひ(なく一本)ひ(ひ)く(ひ)て、こ(こ)ころなるべし。

三十四

むかし、男、こ(こ)ころにもあらで(絶え)た多(絶え)にける女のもとに、

たまのををあ(む)はをによりてむすべれば

あひてのちもあ(あ)はぬ(あ)なりけり

三十五

昔、

「わすれぬるなめり」

と、とひび(こ)としける女のもとに、

たにせばみみねまでは(峯)多る玉かづら(道)

た(絶え)多んと人をわがおもはなくに

女、か(多)多し、

いつはりとおもふものからいまさら

たがま(誰)ことをかわれはたのまむ

三十六

昔、男、いろごのみなりける人をかたらひて、うしろめたなしとやおもひけむ、

我ならで(下紐)したひもとくなあさがふ(ほ)

ゆふかけまたぬ華にはありとも

女、か(多)多し、

ふたりしてむすびし(紐傍書)物をひとりして

あひみむまではと(解)かじとぞ思(心)・

三十七

昔、紀有常、物にいきて、ひさしうか(多)多らざりけるに、いひやる。

君によりおもひならひぬよ(世)の中の

人は(戀)これをや(心)こひといふらん(む)

か(多)多し、

ならばねばよのひと(心)ことになにをかも

戀(世)とはいふこととひわぶれども

三十八

昔、わかきをとこ、けしうはあらぬ人をおもひけり。さかしらするを(お)やありて、おもひもつくどて、この女を
ほかへ(や傍書)ならむといふ。人のこ(子)なれば、心のいきほひなくて、(え)多とどめず。をんなもいやしければ、すま(心)う
ちからなし。さ(心)こ(心)多、まだ多(心)やらざるあひだに、思(心)・はいやま(心)なりにま(心)さる。を(心)や、この女をお(心)ひいづ。
男、ち(心)のなみだをを(心)とせど、とどむるちからなし。ついにいぬれ(心)・、女、返(心)・・人につけて、

いづ(心)こまでをくりはしつと人とはば

あかぬわかれのなみだがわ(心)ままで

をとこ、なく／＼よめる、

いとひてはたれかわかれのかたからむ

ありしにまさる今日はかなしな

とよみて、たへいりにけり。をやあはてにけり。『なをざりにおもひてこそいひしか。いとかくしもあらじ』とおもふに、まことにたへいりたれば、まごひて、願などたてけり。けふのいりあひばかりにたゞいりて、またの日のいぬ時ばかりになむ、からうじていきいでたりける。昔のわか男は、かかるすけるものおもひをなんしける。今のおきな(一翁)、まさにしなむやは。

三十九

昔、女はら(一姉妹)からふたりありけり。ひとりはいやしき男のまづしき、ひどりはあてなるをとこの(一徳)、とくあるもちたりけり。そのいやしき男もたる、しはすのつごもりに、うゑ(一十二月)のきぬをあらひて、手づからはりけり。心ざしはいたしけれども、いまだ、さるわざもならはざりければ、うゑ(一)のきぬのかたをはりさきてけり。せんかたもなくて、なきにのみなきけり。

これをかのあてなる男きぎて、いとこころぐるしかりければ、いときよげなりける四位のうゑ(一)のきぬ、ただかたどきにみいでて、

むらさきのいろ(一)こきときはめもはるに

のなる草木ぞわかれざりける

むさしのこころなるべし。

四十

昔、男、好色とする／＼、をんなをあひしれり。にくくもあらざりけれども、なを(一)、いとうたがひ(一)、うしろめたなし。そへに、いとただにはあらざりけり。ふつかばかりいかで、かくなむ。

いでてゆくあ(一)とだにいまだかはかぬに

たがかよひちといまはなるらん

ものうたがはしさに、よめるなりけり。

四十一

昔、かやう(一)のみことまうすみ(一)をはしけり。そのみこ、をむなをいとかしこうめしつかひ給・けり。いとなまめきてありけるを、わかき人は、ゆるさざりけり。われのみとおもひけるを、また人、ききつけて、ふみやる。

ほととぎすのかたをつくりて、

郭公(夜)ながなくさとのあまたあれば

なを(ほ)うとまれぬおもふものから

とい(言)ゑりけり。このをんな、けしきをとりて、

名のみたつしでのたを(田長)さはけさぞなく

いほりあまたにうとまれぬれば

時は五月(に)なむありければ、男、またかゑし、

いほりお(ほ)おきしでのたを(ほ)さはなをたのむ

わがすむさとに(絶え)こゑしたゑずは

四十二

昔、あがたへゆく人に、むまのはなむけせん(む)とて、よびたりけるに、うとき人にしあらざりければ、

い(家刀自)ゑどうじして、さかづきささせなどして、をんなのさ(装束)うぞくかづく。あるじのをと(を)こ、うたおよみて、も(裳)

こ(腰)しにゆ(結)ひつけさす。

いでてゆく君がためにとぬぎつれば

われさ(こ)ゑもなくなりぬべきかな

四十三

昔、みやづかへしける男、すずるなるけ(汚)からひにあひて、家(お)にこもりいたりけり。時は(六月)みな月のつこもりな

り。ゆふぐれに、風(き)すずしく吹・螢など、とびちがうを、まほり(賦)ふせりて、

ゆくほたる雲のう(こ)ゑまでいぬ(こ)くは

秋かぜふくと(雁)かり(告)につげこせ

四十四

昔、すきものこころ(こ)ば多あり、あてやかなりける人のむすめのかしづくを、いかでもいはむとおもふ男あ

りけり。こ(女)ころよはく、いひいでん(難)ことやかたかりけん、ものや(病)みになりて、しぬ(こ)べきとき、

「かへんそおもひしか」

といふに、を(お)や、ききつけたりけり。ま(男)どひきたるほどに、し(女)にければ、い(こ)ゑにこもりて、つれ／＼とながめ
て、

くれがたきなつ(暮)のひぐらしながむれば

その事となくものぞかなしき

四十五

昔、男、ねんごろに、いかでとおもふ女ありけり。されど、(女)この男あだなりとききて、つれなさのみまさりて、

おほぬさ(大幣)のひく手あまたにきこゆれば

おもゑ(え)どゑ(頼)こそたのまざりけれ

かゑし(朱書)、を(二)と(一)、

おほぬさ(名)となに(流)こそたてれなかれても

つひによるせは(あるといふものを清古)あるてうものを

(お)

四十六

昔、をとこありけり。ものへゆく人に、むまのはなむけせん(む)とて、日(一日)ひとひ、まちけるに、こ(來)ぎりければ、

いまぞ(知)しるくるしきものと人またむ

さ(里)とを(離)ば(訪)かれずとふべかりけり

四十七

昔、男、いもうとの、をかしげなるをみて、

うらわかみ(若)ねよげ(寝)にみゆわかぐさを

人のむすばぬことをしぞおもふ

とき(え)こゑければ、かゑし(二)、

はつぐさ(言)のなごめづらしき(葉)ことのはぞ

うらなくものをおもひけるかな

四十八

昔、男ありけり。人をうらみて、

鳥(十)のこ(十)をとおづ(十)とおはかきぬとも

おもはぬ人をおもふものは一本
いかがたのまむ人のこころを

といゑ(言)りければ、をんな、

あさつゆはきぬのこりてもありぬべし(消え)

たれかこの世をたのみはつべき

また、男、

ふくかぜに(去年)こそこのさくららはちらずとも

あなた(の傍書)と みがた人のこころや

また、かゑし(心)、をむな、

ゆく水にか(敷)ずかくよりもはかなきは

おもはぬ人をおもふなりけり

また、男、

ゆく水と(過)すぐるよは(齢)ひと(散)ちるはなと

いづれ(待)まてて(心)を(心)ま(心)くら(む)ん

あだにて、たがひに、しのびありきする事をいふなるべし。

四十九

昔、男、人前(せんざい) 裁(せ)う(え)けるに、

う(う)つ(つ)し(し)う(う)ゑ(え)ば(ば)秋(あき)な(な)き(き)と(と)き(き)や(や)さ(さ)か(か)ざ(ざ)ら(ら)む

はな(は)こ(こ)そ(そ)ち(ち)ら(ら)め(め)ね(ね)さ(さ)ゑ(ゑ)か(か)れ(れ)め(め)や

五十

昔、男在(り)・けり。人のもとより、かざりちまきを(お)こせたる、かゑ(心)り事に、

あやめかりきみはぬま(沼)にぞまごひける

われは(野)の(野)にい(い)づ(づ)て(て)かく(く)ぞ(ぞ)お(お)ら(ら)し(し)き

とて、き(雉)じ(雉)を(を)な(な)む(む)や(や)り(り)ける。

五十一

昔、男、あ(あ)ひ(ひ)か(か)た(た)一(一)本(本) ありがたかりける女に、あひて、物語などするほどに、鳥のなきぬれば、

いかで(は)かく(は)く(は)と(と)りの(は)な(な)く(く)ら(ら)む(む)ひ(ひ)と(と)し(し)れ(れ)ず

おも(お)ふ(ふ)こ(こ)ろ(ろ)は(は)ま(ま)だ(だ)よ(よ)ぶ(ぶ)か(か)き(き)に

五十二

昔、男、つれなかりけるをんなに、いひやりけり。

ゆきやらぬゆめぢをたどるたもとは

あまつそらなき露やをくらん

五十二

昔、男、ふして思(心)、をきておもひ、あまりて、

わが袖はくさのいほりにあらねども

くるればつゆのやどりとぞなる

五十四

昔、人しれぬものおもひけるをとこ、つれなき女のもとに、

こひわびぬあまのかるもにやどるてう

われから身をもくだきつるかな

五十五

昔、こころづき、なまいろ(色好)のみなる男、ながをかといふ所に、家つくりてをりけり。そことなり(なり傍書)。〇ける

みやばらに、こともなきをむなどもありけり。い(あ)なかなりければ、たかすとて、このをとこ、み(見)をりけるに、

「いみじのすきものはや」

とて、あつまり(いりければ一本)いりければ、此男、お(奥)くににげいりにけり。をんな、かく、

あれにけりあはれいくよのやどなれや

すみけむ人のをとづれもせず

といひて、あつまりきければ、男、

むぐら(華)をひてあれたるやどのうれたまは

かりにもを(一本)ぎのすだくなりけり

といひてなむ、いだしたりける。この女ども、

「ほ(種)、ひろはこ」

とていひければ、

うちわびてをち(落穂)ほひろぶとき(かませば

われもた(田面)つらにゆかましものを

昔、男ありけり。みやづかへもいそがしくて、こころもまめならざりければ、家童(刀童)とじ、
「まめに思はむ」

といひける人につきて、人のくにへ(往)にけり。この男、うさ(宇佐)のつかひ(使)にていきけるに、あるくに(祗承)の(妻)官人の
めにてなむあるとききて、

「をんなあるじに、かはらせとらせよ。さらば(飲)のまむ」

といひければ、かはらせとらせていだしたりけるに、さかななりけるたちばなをとりて、

五月(大)まつはなたちばな(香を)のかほかげば

むかしの人のそで(香)のかぞする。

とい(言)ひけるにぞ、おもひいでて、あま(尾)になりて、やまには(入)いりにける。

昔、つくしまでいきたりける男ありけり。

「これは、いろこのむなるすきものぞ」

と、すだれのうちなる人のいひけるをききて、をとこ、

そめ(染川)かわをわたらむ人のいかでかは

いろ(ふ)なるてう(ふ)こと(な)からむ(一本)なき

をむな、かゑし、

なに(お)しほはばあだ(あゑ)にぞおもふたはれじま

なみのぬれぎぬきるといふなり

昔、年(ろ)來をとろへ(ろ)ざりけるをむな、こころかしこくやあらざりけん(む)、はかなき人(言)のことにつきて、人の國な
りける人につかはれて、もとみし人のまへにいできて、物くはせなどしありきけり。ながきかみを、きぬのふくろ
にいれて、とほやまずりの、ながきあををぞきたりける。

「よざり、このありつる人たまへ」

とあるじにいひければ、を(お)こせたりけり。

「われをば、しらすや」

とひ、

いにしゑのほひはいづらさくら花

ちれるかことも一本
わけるがこともなりにけるかな

とひふき、いとほひかしくおもひて、いらへもせでいたりけるを、

「など、いらへもせぬ」

とひふば、

なみだのながるるに、めもみゑず、物もいはれず」

とひふば、をこし、

これやこのわれにあふみをのがれつ

年月ふれどまさりがほなみ

とひひて、きぬぬぎてとらせけれど、すててにげにけり。いづらにぬらんともしらず。

五十九

昔、よごころあるをむな、『いかでこのなさけある男をかたらひてしがな』とおもへども、いひいでむにも、たよ

りなければ、まことならぬゆめがたりを、むす三人をよびあつめて、かたりけり。ふたりのこは、なさけな

く、いらへてやみぬ。二郎なりけるなむ、

「よき御をこぞ、いづれにむ」

とあはするに、この女、けしきいとよし。『こと人はなさけなし。いかで、この在五中將にあはせてしがな』とおも

ふごころありけり。

かりしありきけるみちに、ゆきあひにけり。むまのくちをとりて、

「やう／＼なむ思」

といひければ、あはれがりて、ひとよねにけり。さて、のち、をさ／＼こねば、をんな、をこの家にいきて、か

ひまみけるを、男ほのかにもみて、

百年にひととせたらぬつくもがみ

我をこふらしおもかげにたつ

といひて、むまに、くらをかせて、いでたつけしきをみて、むばらからたちともしらず、はしりまどひて、家にきてふせり。をこし、このをむなのせしやうに、しのびてたてりてみければ、をむな、うちなげきて、ぬとて、

さむしろにころもかたしきこよひもや

戀(寝)しき人にあはでわがねむ

とよみけるを、あはれとみて、そのよはね(夜)にけり。世(寝)中のれ(よのなか)ひとして、思ひ思はぬ人あるを、この人は、そのけぢめみせぬころなんありける。

六十

昔、男、をむなを、みそかにかたらふわざもせざりければ、いづこなりけん、あやしきによめる。

吹(風)・風にわがみをなさばたますだれ

ひまもとめついでは一本らましものお

かゑし、

とりとめぬかぜにはあれどたますだれ

たがゆるさばかひまもとむべき

とてやみにけり。

六十一

昔、みかどの、ときめきつかはせたまふをむな、いろゆるされたるありけり。おほみ大やすんど御ころ所とていまそかりけるが御いとこなりけり。殿上てんじやうにつかはせ給(給)・ける在原なりけるをとこ、をむ女ながたゆるされたりければ、をむなのある所にいき、むかひをりければ、女、

「いとかたはなり。みもほろびなん。かくなせそ」

といひければ、

おもふにはしのぶる事ぞまけにける

あふにしかゑ(代)ばさもあらばあれ

とといひて、さうし(曹司)にをりたまへば、いとど、さうしには、人のみるをもしのばで、のぼりあければ、このをむな、思(思)・わびて、なへゆきければ、

『なにのよきこととおもひて、ゆきかよふに、皆人ききてわらひけり。』

とて、このもじ(本)かさのみるに、くつはとりて、を(奥)になげいれて、のぼりあて、かくかたはにしつつありわたるに、み(身)もいたづらになりぬべければ、ついにほろびぬへしとて、この男、

「いかにせむ。わかかる心やめたまへ」

と、佛神にも申・けれど、いやまさりつつ、おぼえつゝなをわりなく戀・事のみおぼへければ、かむなき、
陰陽師、戀せじといふみそぎのぐしてなむいきける。はらへけるままに、いどどかなしき事のみかずまさりて、あ
りしよりけに戀しくおぼ多ければ、

戀せじとみたらし河にせしみそぎ

神はうけずもなりぬけるかな
けらしな浦古

といひてなむきにける。

このみかどは、御かほかたちよくおはしまして、暁には佛の御なを心にいれて、御こゑはいとたうとくて申・
給・をききて、此女はいたうなげきけり。

「かかるきみにつかうまつらで、すくせつたなうかなしきこと、この男にほだされて」

と思・てなんなきける。かかるほどに、みかどきこしめしつけて、此男ながしつかはしければ、あのをむなをば
いとこの御息所、まかでさせて、とのくらにこめて、しをりたまひければ、くらにこもりて、なく／＼

あまのかるもにすむむしのわれからと

ねをこそなかめよをばうらみじ

となきをれば、此男、人のくにより、よごと(夜毎)にきつつ、ふゑいとおもしろくふきて、こゑはいとをかしくて、うた
をぞうたひひける。此女くらにこもりながら、そこにぞあなりとはききけれど、あひみるべきにもあらで、かく
なん。

さりともとおもふ覽こそかなしけれ

あるにもあらぬ身をばしらずて

とおもひをり。女しあはねば、かくしありきつつ、うたふ。

いたづらにゆきてはかゑるものゆ／＼に

みまくほしさにいぎなはなれつつ

みづのをの御時事なるべし。おほみやすんどころとは、むめどののきさきなり。

六十二

昔、男、つ(津)のく(く)に(に)しる所ありけり。あにをとと、ともだちなむどひきいて、なきさをうちみれば、ふねども
のあるを、

なにはづ(難波津)を今日こそみつのうら(御津)いとこ

これやこのよをうみ渡・ふね

これをあはれがりて、人／＼かゑりにけり。

六十二

昔、男、いづみの國にいきけり。つ(種)の國住吉のこほり、すみよしのさとのはまゆく(を)に、いとおもしろければ、をり(を)いつつ、ある人、

「住吉はまとよめ」

といふに、

かり(雁)なきてきくの花さく秋はあれど

はるはうみ江(江)にすみよしのはま

とよめりければ、皆人よまずなりにけり。

六十四

昔、男ありけり。伊勢國(伊)かりのつかひにいきけるを、かのいせの齋宮なりける人のを(親)や、

「つねの使よりは、この人よくいたはれ」

といひやれりけり。を(親)やのいふ事なりければ、いとねんごろにいたはりけり。あしたには、かりにいだしたててやり、ゆふさは、ここにかゑり(か)こさせけり。かくねんごろにいたはりけるほどに、いひつきにけり。一日といふ夜、

「われてあはん」

といふ。女はた、いとあはじともおもへらず。されど人目のしげければ、ゑ(え)あはず。つかひぎねとあるひとなれば、と(は)をくもやどさず。ねやちかくなんありける。女、人をしづめて、ね(千)ひとつばかりに、男もとにきにけり。をとこ、はた、ねられざりければ、と(外)のかたをみだして、ふせるに、月のおぼろなるに、人のかげするをみれば、ていさきわらはをさきにたてて、人たてり。男いとうれしくて、我(種)ぬるところに、いていりて、ね(あ)ひとつより、うしよつまで、物かたらひけり。いまだ、なに事もかたらひあゑぬほどに、女かゑりにければ、をとこ、いとかなしくて、ね(種)ず成(成)にけり。つとめて、ゆかしけれど、我人をやるべきにしあらねば、こころもとなくて、まぢみれば、あけはなれて、しばしあるほどに、女のもとより、ことばはなくて、

君やこしわれやゆきけんおもほ(え)多(多)ず

ゆめかうつつかねてか(種)さめてか

男、いたううちなきて、

かきくらす(の傍書)ニまニとニひニき・やみに□□□□にき

ゆめうつとは(よ一本)ひさだめよ

とて、かり(狩)にいでぬ。野にありきけれど、ニろはそらにて、いつしか日もくれなむとおもふほどに、國守のいつきの宮のかみ(頭)かけたりければ、かりのつかひありとききて、よ(夜)ひとよ、さけのみしければ、も(事)はらあひ事もせで、(明)あけば、尾張國へたちぬべければ、をとこも、女も、なみだをながせども、あふよしもなし。よ(夜)やう／＼あけなんとするほどに、女のかたよりいささかづきのうらに、

(徒歩)かち人の渡・ばぬれぬ江にしあれば

とかきて、すゑはなし。そのさかづきのうらに、つひまつ(戻)のすみしてかきつく。

またあふさかのせきは(え)なむ

あくれば、を(尾張)はり(え)にけり。

六十五

昔、男、かりのつかひよりか(え)りけるに、おほよどの渡・にやどりて、いつきの宮のわら(は)に(い)ひかけける。

みるめかる方はいづこぞさをさして

われにをしへよ(海人)あまのつりぶね

六十六

昔、男、伊勢齋宮に、内の御つかひにてまいれりければ、かのみやに、す(すく)てこと(一本)いひける女、わたくし(こ)とに
て、

ちはやぶる神のいがきも(え)ぬし

おほみや人のみまくほしさに

をとこ、

戀しくはきてもみよかしちはやぶる

神のいさむるみちならなくに

六十七

昔、そこにありとききけれど、消息をだにいふべくもあらぬ女のあたりをありきて、男のおもひける。

ありとみて手にはとられぬ月の中の

六十八

むかし、女をいたくうらみて、

いわねふみかさぬる山はへだてて

あはぬひおほくこひわたるかな

六十九

昔、男、伊勢國なりける女、うらみければ、をむな、

おほよどのはまにをふてふみるからに

こころはなぎぬかたらはねども

といひて、ましてつれなかりければ、

袖ぬれてあまのかりほすわたつうみの

みるめあふまでやまむとやする

をんな、

い^(昔聞)わ^(生)ま^(生)よりをふるみるめしつねならば

しほ^(しほる)ひ^(はか)しほ^(か)み^(ち)か^(か)ひ^(も)あ^(あ)ら^(あ)な^(な)む

また男、

なみだにぞぬれつつしぼるあだ人の

つら^(つら)き^(き)こ^(こ)ろ^(ろ)は袖のしづくか

とのみいひて、よにあふことかたき事になむ。

七十

昔、男、伊勢國なりける女を、またはゑあはで、となりの國へゆくとして、うらみければ、をんな、

おほよどのまつはつらくもあらなくに

うら^(うら)みて^(て)のみ^(み)も^(も)か^(か)ゑ^(ゑ)る^(る)な^(な)み^(み)かな

七十一

昔、二條のきささきの、春宮の御息所と申・けるころ、うち^(氏)神にまうで給・けるに、つかふまつれりける近衛つかさなりけるをきな、人／＼のろくたまはりけるついでに、御車よりたまはりて、よみてたてまつる。

おおはらやをしをのまつもけふこそは

神よのごともおもひいづらめ

七十二

昔、きたのみこと申・みこいましかりけり。たむらの御門の御におはしますそのみこうせ給・て、なな七日の御わざ、安祥寺にてしけり。右大將藤原常行といふ人、そのみわざにまいり給・て、かゑさに、やましの禪師みこ御もとにまいりたまふに、其やましなみや、たきをとし、水はしらせなどして、おもしろうつくれり。まうで給・て、

「年來、よそにはつかふまつれど、まだ、かくはまいらず。こよひは、ここにさぶらはん」

と申・給・を、みこ、よろこび給・、よるのをましどころまうけさせ給・。この大將、いでて人にたばかり給・やう、

「みやづかへのはじめに、ただにやはあるべき。三條二御行ありしとき、紀伊國の千里のはまにありける、いとおもしろきいたてまつれりき。御行後にたてまつりしかば、あるみさうしのまへのみぞにするたりしを、このみこのみたまふものなり。かのいしをたてまつらむ」

とのたまひて、とりにつかはす。いくばくもなく、もてきぬ。このいし、きくよりは、みるまさりたり。

「これを、ただにてたてまつらば、すずろなるべし」

とて、人／＼にうたよませ給・。右馬頭なりける人よめり。

あかねどもいわにぞかふるいろみゑぬ

こころをみせんよしのなければ

このいしは、あをきいけをきざみて、まきゑをしたらんやうにぞありける。

七十三

昔、うちの宮にみこうまれたまゑりけり。御うぶやに、皆人／＼うたよみけり。御おほぢのかたなりけるをきなよめる。

わがもとにちひろあるかげをうゑつれば

夏ふゆたれかかくれざるべき

これは貞數の親王、行平中納言のむすめのはらなり。清和の親王也。時人、中將のことなむいひける。

七十四

昔、を^(一)と^(二)ろ^(三)ゑ^(四)たる^(五)い^(六)ゑ^(七)に、藤花うゑたる人ありけり。いとおもしろうさけりけり。やよひのつごもり、あめのそぼふるに、人のもとにを^(一)りて^(二)たて^(三)まつるとて、

ぬれつつぞし^(一)ゐ^(二)て^(三)を^(四)り^(五)つ^(六)る^(七)藤^(八)は^(九)な

はるはいくかもあらじとおもへば

七十五

昔、ひだりのおほひまうちぎ^(一)み^(二)い^(三)ま^(四)そ^(五)が^(六)り^(七)ける、かもが^(一)は^(二)の^(三)ほ^(四)と^(五)り、六條を、いとおもしろくつくりて、すみたまひけり。神無月のつごもりがたに、菊花うつろひて、木草の色ちぐさなるころ、みこたちおはしまさせて、さけのみ、あそびて、よあけゆくままに、こののおもしろきよしほむる哥よむに、そこなりけるかたい^(一)を^(二)き^(三)な、皆人によませはてて、いたじきのしたを、はひありきて、よめる。

しほがまにいつかきにけんあさなぎに

つりするふねはこによろなむ

とよめるは、みちの國にいきたりけるに、あやしくおもしろき所／＼おほかりけり。わが御門六十余國の中に、しほがまといふ所に^(一)に^(二)たる^(三)所^(四)な^(五)かり^(六)けり。さればなむ、かのを^(一)き^(二)な^(三)も^(四)め^(五)で^(六)て、しほ□^(一)ま^(二)、うきじまのかたをつくれりけるとなむ。

七十六

昔、ふかくさの御門の、せりかはのみゆきしたまひけるに、なまを^(一)き^(二)なの、いまはさる事にげなくおもひけれど、つきにけることなれば、お^(一)か^(二)た^(三)の^(四)た^(五)か^(六)が^(七)ひ^(八)にて^(九)さ^(一〇)ぶ^(一一)ら^(一二)ひ^(一三)給^(一四)・けるを、すり^(一)かり^(二)ぎ^(三)ぬ^(四)の^(五)た^(六)も^(七)と^(八)に、つるのかたをつくりて、かきつける。

を^(一)き^(二)な^(三)さ^(四)び^(五)人^(六)な^(七)ど^(八)が^(九)め^(一〇)そ^(一一)か^(一二)り^(一三)こ^(一四)ろ^(一五)も

けふばかりとぞたづもなくなる

行平か

お□^(一)や^(二)け^(三)の^(四)御^(五)き^(六)そ^(七)く^(八)も^(九)あ^(一〇)し^(一一)か^(一二)り^(一三)けり。を^(一)の^(二)が^(三)よ^(四)は^(五)ひ^(六)お^(七)お^(八)も^(九)ひ^(一〇)け^(一一)れ^(一二)ど、わかからぬ人、ききとがめけり。

七十七

昔、これたかときこゆるみこおはしけり。やまざきのあなたに、水成瀬といふ所に、宮ありけり。年ごとの櫻花ざかりに、かしこるなむかよひたまひける。その時、右馬頭なりける人、常に^(一)お^(二)は^(三)し^(四)ま^(五)し^(六)けり。なぎさのみむのさくら、ことにおもしろくさけり。きのもとにを^(一)り^(二)ゐ^(三)て、かざしにさして、皆人哥をよむに、うまのかみなりける人のよめり。

世中にたゞ多てさくらのかかざらば

はるのこころはのどけからまし

又人、

ちればこそいとどさくらにはあはれなれ

なにかうきよにひさしかるべき

七十八

昔、をなじみこ、かたのにかりしありき給・けるに、右馬頭なりける人を、かならず御もとにゐてありき給
・けり。れいのごと、ありき給ふに、この人、かめにさけをいれて、のにもていでたり。のまむとて、きよき所もと
めゆくに、あまのかわといふ所にいたりぬ。右馬頭、御みきまいる。みこの、のたまひける、

「かたのをかりて、あまのかはらにいたるを題にて、歌よみて、さかづきは、させ」

との給・ければ、よみてたてまつれり。

かりくらししたなばたつめにやどからむ

あまのかはらに我はきにけり

ときこゑければ、この哥を、みこ、返・詠・給・て、かゑしゑしたまはず。紀有常、御共につかふまつりたり
けるが、返・、

ひととせにひとたびきまますきみまてば

やどかすひとあらじとぞおもふ

かゑりて、みやにいらせたまひぬ。よふくるまで、さけのみ、物語して、あるじのみこ、ゑひていたりたまひな
むとす。十日あまりの月かくれなむとす。それに、かのうまのかみなりける人のよめる。

あかなくにまだきも月のかくるるか

やまのはにげていれずもあらなむ

みこにかはりて、紀有常、

をしなべてみねもたひらになりなむ

やまのはなくば月もかくれじ

七十九

昔、水成瀬にかよひ給・惟高のみこ、れいのかかりしありき給・にけり、御共に、右馬頭なりけるをきなつか

うまつれり。ひごころへて、みやにかへり給・にけり。御をくりして、とくいなむとおもふに、御みきたまひ、ろく
たまはせんとて、つかはせざりければ、いひつゝもとなくへ、

枕とてくへさひきむすぢいとせせ

あきのよとだにだのまれなくに

とよみければ、やよひのつゝもりなりけり。みこ、御とのいもらで、あかし給・けり。

かくしつゝ、まいりつかふまつりけるを、おもひのほかに、御ぐしをろさせ給・て、をのといふところすみ給
・けり。むつきにをがみたてまつらむとてまうでたるに、ひぢの山のふもとなれば、雪いとたかし。しゑて、みむ
ろにまうでて、をがみたてまつるに、つれ／＼と、いともがなしうておはしましければ、ややひさしうさぶら
ひて、いにしへの事など思・ひづて、きこゑさせけり。さてもなぶらひてしがなとおもへども、おほやけ事もあれ
ば、おほやけは、くれにかゝるとてよめる。

わすれてはゆめかとぞおもふおもひきや

ゆきふみわけて君をみむとは

とよみて、なく／＼かゝりにける。

八十

昔、男ありけり。身はいやしなから、はは、みこなりけり。そのはは、ながをかといふ所にすみ給・けり。こ
は、京にみやづかへしければ、まうづとしけれど、しば／＼もまうでず。ひとりごにさへありければ、いとかな
しうし給・けり。さるほどに、しはすばかりに、畠のこととて御文あり。をどろきてみれば、こと事はなくて、
をひぬればさらぬわかれのありといへば

いよ／＼みまくほしききみ哉

となむありける。これをみて、むまにもりあゑずまいるとて、みちすがら、おもひける。

世中にさらぬわかれのなくもがな

ちよと も たのむ人のこのため

八十一

昔、男ありけり。わらはよりつかふまつりけるきみ、御ぐしをろし給・てけり。もとのこころうしなはじとて、
む月にはかならずまうでけり。おほやけにみやづかへしければ、しば／＼もままいらざりけれど、心ざしばか
りは、かはらざりければ、まうでたるに、また昔つかふまつりし人の、俗なる、法師なる、まいりあつまりて、正

月なれば、ことたへとて、おほにぶきたまひけり。雪（みきい）はすがごとくふりて、ひねもすにやまず。皆人（衆）多（多）ひて、
「雪（ゆき）にふりこめられたるを題（だい）にて、歌よまむ」

おもゑども身をしわけねばめかれぬ

雪のつもるぞ我（わが）こころなる

とよめりければ、みこ、いいたう、あはれがりて、御（おん）ぞぬぎてたま（た）多（多）りけり。

八十二

昔、いとわかき男、わかき女をあひい（言）多（多）りけり。を（お）の（お）／＼を（お）やありければ、つつみていひさしてけり。年来（しる）へ
て、女の方より、

「なを、この事とげん」

とい（い）多（多）りければ、男、うたをよみてやれりけり。いかがおもひけん、

いままでにわすれぬ人はよにもあらじ

を（お）のがさま／＼としのへぬれば

といひて、やみにけり。男女のあひはなれぬみやづかへになむいで（た）ち（り）ける。

八十三

昔、男、つ（津）の國、むばらの郡あしやの里に、しるよしありて、いきてすみけり。昔歌に、

あしのやのなだのしほやきいとまなみ

しげのを／＼しもさささずきにけり

とよめるは、このさとをよめるなり。ここをなむあしやのなだとはいひけり。このをとこ、なまみやづかへしけれ
ば、それをたより、衛府のすけども、あつまりきにけり。このをとこのあにも、衛府頭（衛）なりけり。その家のうみ
のほとりにあそびありきて、

「いぢ、この山のうゑ（う）にありといふぬのびきのたきみにのぼらん」

といひて、のぼりてみるに、そのたき、物よりことなり。たかさ二十余丈ばかり、ひろさ五丈余ばかりあるいし
のおもてに、しろききぬに、いしをつつみたらんやうになむありける。さるたきのかみに、わらうだばかりにて、
さしいでたるいしあり。その石のうゑ（う）に、はしりかかる水、せうかうじ（本）ばかりのおおきさにて、こぼれをつ。そこ
なる人に、うたよます。この衛府かみ、まづよむ。

わがよをば今日かあすかとまつかひの

なみだのたきといづれまされり

つぎに、あるじよむ。

ぬきみだる人こそあるらめ白玉の

まなくもちるかそでのせばきに

とよめりければ、かたへの人、わらうことにやありけん、このうたにをよみてやみけり。かゝりくるみちとをく
て、うせにし宮内卿もとよしが家のまへすぐるに、ひくれぬ。やどりのかたをみやれば、あまのいさりする火お
ほくみ・るに、このあるじのをとよむ。

はるるよのほしか河邊のほたるかも

わがすむかたのあまのたくひか

とよみて、みなかゝりきぬ。その夜、南のかぜ吹・て、なごりの波いとたかし。つとめて、その家のめのことどもいで
て、うきみるのなみによせられたるをひろひて、いゑにもちてきぬ。をむながたより、そのみるを、たかつきにも
りて、かしはおおゐていだしたり。そのかしはに、かくかけり。

わたつうみのかざしにさすといはふもも

きみがためにはをしまざりけり

井なかの人のうたにては、あまれりたらざや。

八十四

昔、いやしからぬをとこ、それよりまさりたる人をおもひかけて、としへにける。

人しれずわがこひしなばあぢきなく

いづれのかみになき名おおせん

八十五

昔、つれなき人を、いかでとおもひ、こひわたりければ、あはれとやおもひけん、

「（明日）あす、ものこしにて、ものばかりをいはむ」

とゑりけるを、かぎりなくうれしながら、また、うたがはしかりければ、おもしろかりけるくさむらじにつけて、

さくら花けふこそかくもほふとも

あなたのみがたあすのよのこと

と

昔、月日のゆくをさゝなげく男、三月つごもりに、
をしめどもはるのかぎりのけふの日の

ゆふぐれにさゝなりにけるかな

昔、こひしさに、きつつかゝれど、をむなに、せうそこもたせてよめる。

あしどくぐたななしをぶねいくそたび

こぎかゝるらんしるひとなしに

昔、男みはいやしなから、ふたつなき人おおもひかけめりけり。すこしたのみぬべきさまにやありけん、ふし
ておもひ、をきておもひ／＼て、よめる。

あふな／＼おもひはすべしなめなく

たかきいやしきくるしかりけり

昔もかかる事ありけり。よの事はりにやありけむ。

昔、二條のきさひのみやにつかふまつるをとこありけり。女のつかふまつれりけるを、みかはして、よばひわた
りけり。

「いかで、ものごしに對面して、おもひつめたることば、すこしはるけむ」

といひければ、をむないとしのびて、物語などして、をどし、

ひこぼしにこひはまされりあまのかは

ぐだつるせきをいまはとめてよ

これを、おかしとやおもひけん、あひにけり。

昔、男ありけり。女をとかふいふこと月日へにけり。女、石木ならねば、いとをしうやおもひけむ、やう／＼
思・つきにけり。そのころ、みな月のつごもりばかりなり。女、かさもひとつふたつ、みにいでたりにければ、いひ
をこせたる。

「いまは、なにのこころもなし。身にかきも、ひとつふたつ、いづきにけり。時もいとあつし。すこし秋風たてて、あはん」

といふりけり。さて、あきまつほどに、女のちち、そのひとのもとにいづくかなりとききて、いひのしりて、くせできにけり。さりければ、このをむなのせうと、にはかに、むかへにきたりければ、女、かゝでのはつもみぢをひろひて、かきをく。

秋かけていひしなかにはあらなくに

この葉ふりしくゑにこそありけれ

とみせて、

「かしこより人をこせたらば、これをやれ」

といひをきていぬ。さてのち、つひに、よくてやあるらむ、あしくてやあるらむ。さうとさうもしてらむやみぬ。このをとこは、いみじう、あまのさかでをうちてなむのろひをるなる。むくつけき事。人のおもひは、おふものにやあ覽。

「今こそはみめ」

とぞいひける。

九十一

昔、ほりかはのおほるまうちぎみと申・いまそかりけり。四十の賀、九條家にてせられける、屏風に中將なりけるをきな、

櫻華ちりかひまがゑをひらくの

こむといふなる道まべうま
清古や
か一本

九十二

昔、をきおとどときこゆる、をはしけり。つかふまつる男、ながつきばかりに、さくらをつくりたる枝に、きじをつけてたてまつるとて、

わがたのむ君がためにとをる華は

時しもわかぬ物にぞありける

とみよみてたてまつりたりければ、いとかしこがり給て、つかひにろくたまゑり。

九十三

昔、右近馬場のひをりの日、むかひにたてたりける車に、女がほの、したすだれより、ほのかにみゆれば、中将なる人、よめてやる。

みずもあらずみもせぬ人のこひしきは清古戀しくは

あやなく今日やながめくらさむ

かゑし、

しるしらずなにかあやなくわきていはん(む)

おもひのみこそしるべなりけれか一本

九十四

昔、男、弘徽殿のはざまをわたりければ、あるやむごとなき人の御つぼねより、わすれぐさを、

「忍草とやいふ」

とて、さしださせたまへりければ、たまはりて、

忘・草をふる野邊とはみるらめど(れ)

こはしのぶなりのちもたのまむ

九十五

昔、男、みこたちのせうゑうしたまふ所にまうでて、たつたがはのほとりにて、(立田川)

ちはやぶる神よもしらぬたつた河

からくれなひにみづくくるとは(む)

九十六

昔、なまあてなる男ありけり。その男のもとに、ごだちありける。それを、内記なる藤原敏行といふ人よばひけり。このをむな、かほかたちはよけれど、いまだわかかりければにや、文もをさしからず、ことばもいひしらず。いはむやうたはよまざりければ、かのあるじなりける人、文の案をかきて、女にかきうつさす。さてきて、かゑりごとはしけり。ことばいかがありけん、めでまどひて、をとこよめりける。

つれ／＼のながめにまさるなみだがは

そでのみひちてあふよしもし清古ぬれて

かゑし、れひの、をむなにかはりて、

あさみこそ袖はひづらめなみだがは

身みささ急いななががるるととききかかばばたたののままむ

といい急いりりけけれればば、男おとこ、いたいたたううめめででて、ふふみみばばここににいいれれててあありりくくととぞぞいいふふななるる。ををななじじををととここ、ああひひててののちち、ふふみみここせせたたりり。

「ままううででここんんととすするるにに、ああめめののふふるるににななむむ、みみわわづづららひひぬぬるる。みみささひひははひひああららばば、ここのの雨あめふふららでで」
といい急いりりけけれればば、れれひひのの、ををととここ、女おんなににかかははりりて、

かかずず／＼／＼におおももひひおおももははぬぬととひひががたたみ
身みををししるる雨あめははふふりりぞぞままさされれる

ととててややりりたたりりけけれればば、みみののががささももととりりああるるぞぞ、ししととどどににぬぬれれて、ままどどひひききけけりり。

九十七

昔むかし、ををむむなな、人ひとののこころろををううららみみて、

風かぜふふけけばばととははにに波なみここすすいいそそななれれや

わわががこころろもも手てののかかははくくととききななき

ととつつねねののここととぐぐささににいいひひけるを、ききききををよよひひける男、

よよひひこことと江えににかかははづづののいいたたくくななくくななるは

水みづここそそままさされれ雨あめははふふららねねど

九十八

昔むかし、男おとこああけけりり。ううたたははたたよよままざざりりけけれれどど、世よ中ちゆうををおおももひひししりりたたりりけけるる。ああててななるる女おんなののああままににななりりて、よよのの中ちゆうををおおももひひくくわわんんじじて、京きやうににももああららずず、ははるるかかななるる山やま里りににすすみみけけりり。ももととししたたししかかりりけけれればば、よよみみててややりりけけるる。
しんそくなりければ一本

そそむむくくととてて雲うみににははののららぬぬももののななれれど

よよののううきき事ことぞぞよよそそににななるるてう 清古此哥不入

九十九

昔むかし、男おとこああけけりり。深ふか草くさ御ご門もんににつつかかふふままつつりりけけりり。そそのの男おとこ、ああだだななるるこころろななかかりりけけりり。こころろああややままりりややししたたりりけけんん、みみここたたちちののめめししつつかかひひ給たま・けるる人ひとをを、ああひひししりりににけけりり。ささてて朝あさににいいひひややるる。

ねねぬぬるるよよののゆゆめめををははかかななみみままどどろろめめば

いいややははかかななくくもも成なり・ままささるる哉

百

昔、ことなる事なくて、あまになれる人ありけり。かたちをやつしたれども、ものゆかしかりけん、(加茂)かもものまつりにいでたるを、をとこ、うたをよみてやる一本よみてやる。

よをうみのあまとし人をみるからに

めくわせよ(ほ)ともおもほゆる哉

百一

昔、男、

「かくてはしぬ(死)べし」

といひやりたりければ、をむな、

白露はけな(消)ばき(え)ゑなん(む)き(え)ゑずとも

玉にぬぐ(え)ぎ人もあらじを

とい(え)ゑりければ、ねたしとおもひけれど、い(え)ろ(え)ぎ(え)は(え)い(え)や(え)まさりけり。

百二

昔、男、ともだちの、人をうしな(え)ゑるがもとに、いひやりけり。

華よりも人こそあだに成(り)・にける

いづれをさきにこ(え)ひむとかみし

百三

昔、男、忍(ひ)・てかよふをむなありけり。それがもとより、

「こよひなんゆめにみ(え)ゑつる」

とい(え)ゑりければ、をとこ、

戀(ひ)・わび(ひ)てい(ひ)で(ひ)にしたま(魂)のあるならむ

夜ふかくみ(え)ゑば玉むすびせよ

百四

昔、男、やむ(こ)となき女に、なくなれりける人をと(む)おら(む)ぶやうにて、いひやれる。

いにしへはありもやすら(む)ん(む)い(む)まぞしる

まだみぬ人をこ(戀)ふるものとは

をむな、か(え)ゑし、

下ひものしるしとするもとけなくに

かたるがごととはこひ(戀)はずぞあるべき

百五

昔、をとこねんごろにいひちぎれるをむなの、ことごまになりけるを、

すま(須磨)のあまのしほやく煙風をいたみ

おもはぬかたにたなびきにけり

百六

昔、をとこやもめにてゐて、

ながらぬいのちのほどにわするるは

いかにみじかきころなる覽

百七

昔、男、ひさしうをと(お)もせで、

「わするるころもなし。まい(ゐ)らむ」

とい(こ)ゑりければ、女、

たまかづらは(木)ふきあまたになりぬれば

た(絶)ゑぬころのうれしげもなし

百八

昔、をむな、あだなるをとこのかたみとて(お)をきたるものどもをみて、

かたみこそいまはあたなれこれなくは

わするる時もあらましも(お)お

百九

昔、いとわかき人にはあらぬ、これかれともだちどもの月見ける、そが中に一人、

おほかたは月をもめでじこれぞこの

つもれば人のお(昔)ひとなるもの

百十

昔、男、をむなのいまだよに(絶)へずとおほえたるが、人のもとに忍(ひ)・ても(き)ゑ(ゑ)てのち、ほどいて、

(近江) (筑摩)
あふみなるつくまのまつりとくせなむ

つれなき人のなべのかずみむ
(鍋) (敷)

百十一

昔、男、むめつぼより、雨につれて、人のまかづるをみて、
まかてけるおみて殿上なりけるをりに一本

鶯(うぐひす)のはなをぬふてうかさもがな
(心) (笠)

ぬるめる人(傍書) きてかゑさむ
(心)

百十二

昔、男、契事あやまてる人に、

やまし(山城)ろのい(井手)での玉たま水手にくみて

たのみしかひもなき(世)よなりけり

かうい(心)ゑど、いらへず。

百十三

昔、男ありけり。深草にすみける女、やう／＼あきがたにやおもひけん、ものへいでたちてゆくとして、
(む)

としをへてすみこしやどをいでていなば

いとど深草野とやなりなむ

をむな、かゑし、
(心)

野とならばうづら(清古いきてとしはへん一本)となりてなきを覽

かりにだにやは君が(来)こざらん
(む)

とよめりけるに、いでてゆかんとおもふ心うせにけり。
(む)

百十四

昔、男、いかなる事ぞおもひけるをりにやありけむ、
(か一本)

おもふ事はぞただにやみぬべき

我とひとしき人しなれば

百十五

昔、男、みやこをいかがおもひけむ、東山にすまむとおもひ、いきて、

住(み)・わびぬいまはかぎりのやま(み)なとこ

身をかくすべきやどもとめてむ

なむど、よみをりけるに、ものいたうやみて、しにいたりたりければ、おもてに、みづそそぎなむどして、いきいで
て、

我う急(い)につゆぞをく(む)なるあまの河

とわたるふねのかひのしづくか

とひいひてぞいききていでたりける。まことにかぎりになりける時、

清古(つひ)につひ(ひ)に行・みちとはかねてききしかど

きのふ今日とはおもはざりしを

とてなむたゑいりにけり。

此本者高二位本朱雀院のぬりごめにをさまれりとぞ

伊勢物語 可秘也

(二〇〇六年度八月二九日付)